

チャンネルとも関連がある。

9 マウスの Phasic Pain に及ぼすケタミンの影響

Andrei B. Petrenko *

Ahmed R. Askalany ・山倉 智宏

馬場 洋・崎村 建司*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
麻酔科学分野

同 脳研究所細胞神経生物分野*

ケタミンは他の麻酔薬と異なり強い鎮痛作用を有する静脈麻酔薬として知られている。その作用は subanesthetic 投与量で認められるとしている。しかしケタミンはヒトの慢性疼痛及び動物痛みモデルにおける痛覚過敏に対する鎮痛効果をもたらす一方、正常の疼痛閾値に及ぼすケタミンの影響に関する明確なデータはまだ欠けている。

今回の実験では正常の C57BL/6 マウスにケタミンの腹腔内投与 (10, 50 及び 100mg/kg) をした後、熱 (radiant heat)、機械的 (von Frey hair, pinprick)、電気刺激 (footshock test) を与え、同量の食塩水の注射を受けた placebo 群と比較し痛覚閾値に対する影響を調べた。

ケタミン投与により、熱刺激に対する逃避反応の閾値は変わらず、電気刺激による vocalization 反応にも影響がなかった。電気刺激による jumping 反応の閾値は上がったが、それはケタミンによる運動失調が原因の可能性がある。ケタミンにより von Frey hair による機械的刺激に対する逃避反応がなくなったが、pinprick test による機械的刺激には変化が見られなかった。

以上より、ケタミンはマウスの phasic pain に有意な鎮痛影響を与えることは考えにくいと思われる。

10 難治性頭痛を主訴とする脊椎転移癌に対する持続クモ膜下鎮痛法の試み

高田 俊和・丸山 洋一・高橋 隆平

北原 紀子

新潟県立がんセンター新潟病院麻酔科

抗癌剤・照射療法・大量麻薬・鎮痛補助薬で疼痛緩和できない腰仙部脊椎転移癌 3 症例に持続クモ膜下ブロックを施行した。ブロック前平均モルヒネ投与量 767mg/日、平均 VAS 9.3 ± 1 で、腰椎領域 (L₄-L₁) クモ膜下腔にカテーテルを留置し脊麻用ブピバカイン (0.5%) を 50 ± 14mg/日より開始した。平均投与期間 2 ヶ月でブロック終了時ブピバカインは 60 ± 0 mg/日であった。ブロック後 VAS 0.7 ± 0.5 * (* P < 0.01) と施行前に比し著明に改善し体動時痛は消失、大幅な疼痛緩和を得た。平均モルヒネ投与量 281mg/日と減量でき全期間を通じ感染症等の合併症を認めなかった。本法は大量麻薬で緩和できない神経圧迫性頭痛を主訴とする末期癌患者に適応を限れば有用な方法と考えられた。

11 メキシレチンが奏効した帯状疱疹後神経痛の 2 症例

渡邊由紀子・傳田 定平・佐久間一弘

北原 泰・今井 英一

新潟市民病院麻酔科

帯状疱疹痛は耐えがたい疼痛を伴うにも関わらず、治療に難渋することが多い。今回、疼痛コントロール不良な三叉神経領域帯状疱疹痛にメキシレチンが奏効した 2 症例を経験した。2 症例とも発症後 2 週間後より同部位に疼痛出現。SGB、イオントフォレーシス、経口療法等での治療を行なうが、日常生活上の制限を来し、疼痛コントロール不良のまま約 1 ヶ月半経過。リドカインドラッグチャレンジテストの反応は症例 1VAS 10 → 7、症例 2VAS 10 → 6。メキシレチン内服に移行したところ、2 症例とも疼痛の改善を認め、その後良好な疼痛コントロールを得た。水疱帯状疱疹ウイルスの活動に起因した神経の損傷により、Naチャンネルが蓄積、異所性興奮している状態にあり、